

「HANGA 東西交流の波」展の試み —銅・木版画の版作りと刷りの実演—

今回の「東西交流の波」展では、講演会と音楽会のほかに、初めての試みとして実作者による版画の版作りと刷りの実演をおこなった。3月6日(日)は銅版画、3月12日(土)は木版画である。銅版画的なばあいはプレス機がなくてはならない。幸い美術館からそう遠くない津西高校に数台プレス機があって、当日の講師の一人土嶋敏男さんの紹介で事前に借用することができた。講師も最初の手前ではこの土嶋さん一人だったが、打合せ中に偶然もう一人の版画家判治佐江子さんが同席していて、版画展のはなしから発展して、それでは二人にお願いしようということになった。役割も分担し、版作りは土嶋さん、刷りは判治さんと決めて準備をととのえ、期待と若干の不安？のうちに当日をむかえた。土嶋さんはまっさらの銅版と、自作を刻んだ幾つかの行程の版で、わかりやすくユーモラスに説明をつづけ、時間がなくなるほどの熱の入れ方。判治さんのほうはむしろ淡々と、けれど実作者ならではの手技における細かい注意を忘れずに、やはり自作の一点を刷ってみせ、みにきていた児童のひとりにやってみたらと勧めていた。顔料の濃さや圧力のかけかたで、出来上がりがこんなに違ってくるものだと納得していた人が多かったようである。木版の実演は小原喜夫さん。この場合はプレス機は必要なく、版画作りももっと身近なので、皆さんより興味深そうにみえた。しかし多色刷りのときは、いくつもの版を用意しなければならないということだけでなく、かさねる色合いとか、ズレの矯正とか以外に繊細な配慮があったうえに、今度は力技のようなバレンによる刷りがある。バレンを実際つくってみせたあと、汗を流して刷ってみせた小原さんをみて、木版の魅力を皆さん新たにするとみえた。両日とも午前一回、午後一回おこなったが、毎回四十人前後の見物があって、終わったあとにもいろいろ質問があって、もういちど会場に足を運んだ人もいたようである。(Hs)



版作り実演風景(銅版画)



刷りの実演風景(銅版画)



木版画実演風景